

森谷 正規 評

# 世界が水を奪い合う日・ 日本が水を奪われる日

橋本淳司著(PHP研究所・1680円)

冒頭に次の文章がある。

「ライバル」(rival)の語源はラテン語で「小川」を意味する rivus の派生語、rivalis であり、これは「同じ川の水利をめぐって争うもの」という意味です。つまり、ライバルとは水の争奪戦をするものを指します。

二一世紀の地球的な最大の問題は、水であるとはかなり前から言われてきた。いまはエネルギー問題の陰に隠れているが、深刻な水不足、水の激しい奪い合いは、海外ではすでに

## 水面下で進む世界的な食糧難

各地域で見られる。その重大な影響は、やがて日本にも及んでくる恐れがある。

水問題の専門家である著者は、海外諸国を調査に歩いているが、激化する水紛争を明らかにする。まずメコン川。その源流はチベット高原であり、中国がチベットを手放すはずがないと分かる。雲南省に下るが、中国内では瀾滄江と称して、自国内の水を使うのは勝手と、政府は大規模ダムをどんどん作る。その影響で、タイ、ラオス、ベトナムで漁獲量が減り、水不足で穀物生産が頭打ちになっていて、下流国の人々の不満が高

まってきた。

その他にも、ヨルダン川をめぐるアラブとユダヤの二千年の水争い、チクリス・ユーフラテス川のトルコとシリア、イラクの水利権争い、アラル海に流れ込むシル川、アム川に関してのタジキスタン、カザフスタン、ウズベキスタンなどの争いを取り上げている。

さて、水は豊富で、国際的な紛争などはない日本は、安泰なのか。かねてより指摘されているが、食糧の輸入は、水の輸入と同じことなのだ。穀物も野菜も肉類も、生産には大量の水を必要とする。その輸入相手国は、水不足にすでに陥っている国、これから深刻になる恐れが大きい国ばかりだ。オーストラリアでは、水泥棒が頻発し、水殺人まで生じていて、米国は、穀倉地帯では地下水を大量にくみ上げているが、枯渇が懸念されている。

中国も、北部は水不足が深刻である。もともと水は少ないのだが、生活水準が上がり、工業が発達して、水需要が急増した。しかも、降水量はかなり減少している。これには地球温暖化も関係している

ようだ。やがて中国は、穀物や肉などを大量に輸入する国になる。それは、世界的に食糧供給を逼迫させる大きな要因になる。

世界的な水不足は、輸入食糧価格の高騰、さらには入手難となつて、日本に重大な影響をもたらす恐れが大きい。いま四〇%の食糧自給率を、何としても大きく上げねばならない。

不足すれば、供給を増やそうとするのは経済原理であり、二一世紀は水ビジネスの時代でもある。その世界的な事情も詳しく述べているが、ただし、それは主に生活用水、工業用水であり、食糧増産にはほとんど関わりはない。

その水ビジネスで、日本とフランスは対照的である。技術大国日本は、水技術でも強い。海水淡水化や水浄化のための高分子分離膜は世界中でトップで

あり、世界中のプラントに販売している。一方、フランスは、下水道施設の管理・運営のビジネスを世界に展開している。そこで世界市場を見ると、管理・運営は二〇二五年に一〇〇兆円だが、分離膜などはわずか一兆円だ。水ビジネスにおいて日本は、技術は大いに進んでいるのだが、市場獲得はまったく遅れている。

ともかくも、水については、世界の状況から目が離せない。国内でも、美味しい水を安く供給してもらおうよう節水に努めて、これからは水に深い関心を持って貰いたいと著者は訴えている。